【 論文 】

バスケットボール指導者の指導観の変容過程
―茨城県バスケットボールスクールの指導を体験して―

加　藤　敏　弘[1]・新　保　　淳[2]

[1] 静岡大学教育学研究科後期３年博士課程・[2] 静岡大学教育学部

要旨

平成 24 年 11 月～平成 25 年２月にかけて、中学１年生を対象に茨城県バスケットボールスクールという全く新しいタイプのプロジェクトを実施した。このプロジェクトは学校体育と社会体育を架橋する可能性を秘めておりその成果を検証することは、今後の運動部活動の在り方を考察する上でも重要となる。茨城県内７会場で 263 名の参加者に対して筆者が海外調査で得た指導プログラムをヒントに作成した指導方針とカリキュラムで実施した。このプロジェクトに指導者として参画した４人の高校教師の運動部活動や体育授業の指導観が、プロジェクトの前後においてどのように変容したのかを、プロジェクト終了後半年経過した時点でインタビュー調査を行い明らかにした。

指導者はこのスクールを体験して中学１年生や普段指導している高校生に対しての認識を新たにした。子どもたちへの期待値を高く設定しすぎると子どもたちの失敗に対してストレスを感じることや中学１年生の段階で個々の技能レベルにかなりの差があることに気づき、一人ひとりの成長過程に合わせた指導が重要であると考えるようになった。また、スクールの指導内容の多様性とその系統性を実感して、ファンダメンタルの重要性をあらためて自覚したことによって、戦術へのこだわりが減少し、選手のファンダメンタルの熟達化が勝利への近道であることに気づき始めた。ボールをもたないときの動きやタイミングの合わせ方を指導するためには、味方や敵の動きばかりでなく空間なども含めて視野をとることが大切であり、そのためには子どもたちの意識改革を促すためのわかりやすくて丁寧な言葉遣いが重要であることなど、指導者が前面に出る指導から子どもたち主体の指導への転換の兆しがみられた。

キーワード

コーチング、指導観、バスケットボールスクール、反省的実践家

１．緒言

中学や高校において運動部活動は、生徒にとって重要なスポーツ活動である。一方、運動部活動を指導する教師においても、自らの指導力を高めるうえで、普段の体育の授業における指導と密接な関係にあると考えられる。

なかでも、新学習指導要領に示された「ボールを持たないときの動き」を中心とした学習内容は、今回新たに提示された内容であり、運動部活動やスポーツ少年団活動でもその定着は難しいとされている。そこで、まず運動部活動やスポーツ少年団活動の指導者に「ボールを持たない時の動き」の重要性やその適切な指導方法を理解してもらうことが必要であると考えた。

筆者は、茨城県バスケットボール協会の協力を得て、指導者がそれらをわかりやすく子どもたちに伝える方法を学ぶ場として、「茨城県バスケットボールスクール」を実施することができた。この事業は、平成 31 年の茨城国体に向けた育成事業の一つであるが、子どもたちの育成もさることながら指導者の育成[1)]に重点が置かれている。具体的には、茨城県バスケットボールスクールは隔週８回の短期プログラムである。

スクールのカリキュラムや指導方法については、茨城県バスケットボール協会育成部での検討を踏まえて筆者が作成し、事前研修会を３回行うと同時に、その資料と指導映像を DVD で配布し、徹底を図った。

指導観の変容については、姫野らによる教育実習を対象にした研究がある[2)]。そこでは教育実習経験の省察（リフレクション）が有効であることが明らかにされている。本研究で対象としたバスケットボールスクールは、ベテランの教員によって行われているが、学校外でのプロジェクトであり、事前に定められた目標と指導方針に則って指導を行う点で、教育実習と同様の作用があると予想される。したがって、本スクール体験後に指導者に省察してもらうことは、自己の指導観の変化を客観的に見直す契機となることが期待できる。

こうした学校外で行われるプロジェクトが教師の指導

観へ与える影響を解明することによって、学校と地域社会の教育活動をつなぐための手がかりを得ることができる。

2．研究の目的

本研究の目的は、茨城県バスケットボール協会主催のバスケットボールスクールにおいて、普段の運動部活動指導とは異なる指導対象の生徒に対し、特別に用意された指導プログラムを用いてコーチングをすることによって、その指導者の指導観にどのような影響があるのかについて明らかにすることである。今年度は、本研究において指導者の指導観への変容を明らかにし、別の研究で子どもたちへの影響を明らかにする。さらに今後は、この事業を発展させることによって、そこに関わった指導者や子どもたちの変化について継続的に調査（アクションリサーチ）する予定である。

3．研究の方法

スクールでの指導経験を省察してもらった上で、普段の学校での体育授業や運動部活動への指導にどのような変化が起こったのかを尋ねる。

(1) 調査対象

平成24年度茨城県バスケットボールスクールは、3地区（県北、水戸、県南）7会場で実施され、各会場5～8名の指導者によって運営された。今回インタビューの対象としたのは、各会場で指導の中心となった7名のうち、全日程を指導した4名とした。いずれも男性で年齢は30～37才、指導歴は8～15年で公益財団法人日本体育協会公認コーチである。

(2) 調査日

平成25年9月1日（茨城県内4高校訪問）

(3) 調査方法

個別訪問により、事前に準備した質問（表1）に基づいて半構造化インタビューを行った。対象者4名には本研究の趣旨と目的を説明し、許可を得てから約25～30分間のインタビューを録音した。質問3ではバスケットボールスクールに参加した子どもたちへのアンケート調査の結果を表2のように解説し、特に質問2で回答してもらったコーディネーション系の指導やボールを持たないときの動きの指導についてさらに掘り下げて質問した。

表1. インタビュー質問項目

①スクール指導の体験を振り返って特に印象に残っていることや全体的な感想をお聞かせ下さい。
②事前研修会で確認したようにコーディネーション系やボールを持たないときの動きの指導は、うまくいきましたか？
③アンケートの結果は、図1の通りです（表3のように解説）。この結果を見て、あなたはどのようにお考えですか？
④スクール指導を体験する前と体験した後で、普段の運動部活動の指導や体育の授業でのあなたの指導に何か変化はありましたか？
⑤今年度のスクールを担当する新しい指導者へのアドバイスをお願いいたします。
⑥あなたの指導歴について確認させて下さい。

表2. 質問3でのアンケート結果の解説（要約）

参加した子どもへのアンケート結果では、90%が満足し、96%がバスケットボールの楽しさを味わうことができたと回答している。また、76%が技能が向上した、87%が知識が増えた、73%がプレー中の視野が広がったと思う、73%がタイミングを合わせることがうまくなったと回答している。これらのことからボールを持たないときの動きについても一定の成果が得られたと考えられる。

相手の動きを予測することがうまくなったと思いますか？という質問では56%が「はい」と回答し、学んだことを友達に伝えましたか？という質問では62%が「はい」と回答している。半数以上が「はい」と回答していることから一定の成果が得られたと判断することもできるが、もう少し高めたい課題でもある。

(4) 分析方法

全ての音声データを逐語録に起こして分析した。データはまずスクールを体験する前と後との変化について語られている部分に焦点を当て、その変化がスクールのどのような体験に基づくものであるのかを中心に検討を繰り返した。その際、「茨城県バスケットボールスクール」というプロジェクトそのものが、全ての指導者にとって初めての試みであることから、一見すると関係のないと思われるデータについても、その関係性を検討するために網羅的に検討した。データから抽出された概念をアウトラインプロセッサー（インスピレーション ver.6, Inspiration software, Inc., 日本語訳：株式会社スリースカンパニー製）に入力し、KJ法によりその概念の構造化を図り、因果関係について矢印で示した。

(5) スクールのアンケート結果について

平成24年度茨城県バスケットボールスクールでは、最終回に子どもたちと保護者にアンケート調査を行った。今回はそのうち、子どもたちに実施したアンケート結果を図1のように円グラフに示しながら質問した。

4．茨城県バスケットボールスクールの概要

(1) 実施内容

平成24年度は、中学校1年生を対象に平成24年11月～平成25年2月にかけて月曜日の夜6時30分から2時間、茨城県内7会場で263名の参加者を得て実現した。指導者には1時間26分の練習ビデオ映像を、参加者には46分の映像を補助資料としてDVDに収録して事前に配布した。

図1．子どもたちへのアンケート結果（指導者への提示用）

(2) スクールの目標と指導方針

スクールの目標と指導方針は、茨城県バスケットボール協会育成部の議論を経て、筆者が平成 22 年度に行ったオーストラリアとブラジル、平成 23 年度に行ったリトアニアとセルビアの子どもたちへの指導現場の調査を踏まえて作成した。目標は表３の通りである。またこの目標を達成するための指導方針は、表４の通りである。

(3) 指導プログラムの内容

スクールで実施する指導プログラムは、表５の通りである。練習内容のつながりを指導者に理解してもらうために、対象学年である小学５年生から中学２年生までの全体像を示した。同様に条件付き５対５についても小学６年生から中学３年生まで条件設定の仕方の違いを示した（表6）。これらは、育成部のメンバーに茨城大学バスケットボール部の練習を見学してもらい、中学生向けにどのようにブレイクダウンしたらよいか意見を聴取し、筆者が考案した。

いずれの内容もスクールの目標を達成するために、手合わせゲーム３対３や４対４のように子どもたちの気づきを誘発するような内容で構成した。手合わせゲームとは、ボールを持たないオフェンスとディフェンスが手を合わせて行うゲームで、味方との連動性と相手との駆け引きを楽しみながら学ぶことができるものであり、筆者が考案した。タイムテーブルは図２の通りである。

(4) 指導者との関わり

このスクールが実現するには、２年間の準備期間を要した。その詳細については、茨城大学教育学部紀要第 63 号（予定）に詳しい。今回調査対象とした４人の高校教師のうち３人は、育成部のメンバーでスクールの企画・運営にも深く関わっていた。

初年度でもある平成 24 年度は、次年度以降の実施に向けて問題点を抽出する試行段階としての意味もあった。４人の高校教師は、こうした次年度以降の課題を意識しながらインタビューに回答している。

５．インタビュー分析の結果と考察

分析の結果、指導者の指導観は「指導対象者への気づき」、「指導内容への新たな発見」、「指導方法の工夫」によって「指導方針の変化」「授業に対する認識の変化」をもたらし、そのことが指導者の「指導観の変容」につながっていることが明らかとなった（図3）。これらのカテゴリーについて順を追って解説する。

(1) 指導対象者への気づき（図４参照）

ａ）中学生への認識の変化

①中学１年生の可能性

中学１年生は高校生と比べると吸収力や理解力が高い。お金を支払って来ているというモチベーションの高さも関係するが、指導者が一方的に低く見積もって

表3. 茨城県バスケットボールスクールの目標

＜知識・理解＞
- バスケットボールの練習には様々な方法があることを知り、どんな練習でも「何を意識するのか」が大切であることを理解することができる。
- バスケットボールスクールで学んだことを日頃の自分のチームの練習に活かすための方法を理解することができる。
- ゲームの条件を変更することによって、ゲームの様相が変化することを知り、そこで必要とされる技術や戦術を理解することができる。

＜技能＞
- 空いている空間にタイミングよく走り込むことができる。
- 味方のために空間をあけることができる。
- 相手がどこに動いて何をしようとしているのかを予測することができる。
- 正しい姿勢を維持し、視野を広く保持できる。
- 左右のオーバーハンド系レイアップショットを身につけることができる。
- 適切なバウンドパスを身につけることができる。
- 無駄なドリブルをしないで、目的に合った強いドリブルをすることができる。
- ハリーバックからハーフコートのしっかりとしたマンツーマンディフェンスを身につけることができる。
- リバウンド争い（ブロックアウトを含む）に積極的に参加することができる。

＜関心・意欲・態度＞
- みんなが安全に楽しくプレイするために、握手をしたり、フロアーに気を配ったりすることが大切であることを理解し実行することができる。
- 茨城県バスケットボール協会制定『プレイヤーのための 10ヵ条』を理解し、守ることができる。
- 自分がバスケットボールを楽しむことができるのは、周りにいる全ての人のおかげであると感謝することができる。
- 平成 31 年に茨城国体が開催されることに関心をもち、選手として出場したり、応援したいという意欲がある。

表4. 茨城県バスケットボールスクールの指導方針

- 競技の厳しさよりも競技の楽しさを伝える。
- 褒めて育てる。
- ボール保持の動きよりもボールを持たない時の動きの重要性に気づかせる。
- アウトプットされた目に見えるスキル（成果）よりも目に見えないけれど子どもたちが何をインプットしたのか、どんなことに気づいたのか（感性）を重視する。
- 技を発揮する力よりも戦術を理解する力を育てる。
- 個人技も大切だが、仲間との協力がバスケットボールの楽しさの根源にあることを学ばせる。
- フルコートを勢いよく走り回ることよりもハーフコートで味方と連動することを重視する。
- アンダーハンドでのボール扱いよりもオーバーハンドでのボール扱いを重視する。
- バウンドパスの有効性を実感させダイレクトパスとの使い分けを理解させる。
- 四肢の強さ（アウターマッスル）よりも骨格を支える筋肉（インナーマッスル）を重視し、ボディバランスを保つ体幹の強さの重要性を伝える。

表5.　指導プログラムの内容と対象学年

	領域	ドリル	DVD	対象	時間	1	2	3	4	5	6	7	8
1	アジリティトレーニング（20分）	鬼ごっこ	＊	小5	4分		○						
		ブラインド手合わせ1on1		小6	2分			◎	○	○	○	○	○
		ボール2つ投げ上げ		小5	3分		◎	○	○				
		背面ボールスウィングからビハインドドリブル		小6	合間		△	△	△	△	△	△	
		その場ドリブル（フロントチェンジ）		中1	3分				◎	○			
		2ボールドリブル各種		中1	4分					◎	○	○	
		対面パス		小6	4分		◎	○					
		2ボール対面パス各種		中1	4分				◎	○			
		マシンガンパス		中1	3分					◎	○	○	
		Y字ピボット		小6	3分						◎	○	
		ヒールツイスト		小6	3分			◎	○	○			
		チェンジオブディレクション		中1	5分						◎	○	
2	チームオフェンス（20分）	トップ、スウィング、ドリブル		中2	7分								
		ハイポストからの展開		中2	7分								
		ギブ＆ゴーからの展開		小6	7分		◎	○	○				
		スウィングパスからの展開		中1	7分			◎	○	○	○	○	
		手合わせゲーム3対3		小6	10分	◎	○	○					
		手合わせゲーム4対4		中1	10分				◎	○	○	○	
3	リングと直結する動き（20分）	ドライブインドリル		小5	5分	◎	○	○	○	○	○	○	
		シェービング		小6	5分		◎	○	○				
		実践シェービング		中2	5分								
		ブラインドドリブルからジャンプショット		中1	5分			◎	○	○			
		3メン3ボールシューティング		中1	5分				◎	○	○		
		5ヵ所シューティング		中1	5分					◎	○	○	
		インサイド2on2		中2	5分								
		フリースロー（2人並列）		小5	合間		△	△	△	△	△	△	
		フリースロー勝ち残りゲーム		小6	最後		△	△	△	△	△	△	
4	ディフェンス（20分）	ひとりディフェンス		中1	7分		◎	○	○			◎	
		1・2・3		小6	3分			◎	○	○			
		ミラーディフェンス		小5	3分	◎	○	○					
		バドミントンコート1on1		小6	3分				◎	○	○		
		3on2パスカット	＊	小6	5分	◎	○	○					
		6：3パスカット		中1	7分					◎	○	○	
		6：4パスカット		中2	7分								
		シェルディフェンス4：4		小5	7分			◎	○	○			
		シェルディフェンス5：5		小6	7分						◎	○	
		ディフェンスサーキット		中2	5分								
5	スクリメージ（30分）	パッシング・ダウン2：2ゲーム	＊	中1	5分			◎	○	○			
		パッシング・ダウン3：3ゲーム		中2	5分								
		3：2～2：1連続ゲーム	＊	小6	5分				◎	○	○		
		3：2～3：3連続ゲーム		中1	10分					◎	○	○	
		ルーズボール3：3ゲーム		中1	10分		◎	○	○				
		条件付き5on5	＊	小5	20分	◎	○	○			◎	◎	

◎：時間をかけてやり方を教える　○：とにかくやってみる　△：他の練習の合間に行う　＊：DVD 収録無し

表6.　5対5の条件設定（抜粋）

＜中学１年生＞
①ディフェンスはハーフコートのマンツーマン。フロントコートでのディフェンスは禁止。
②但し、フロントコートであってもアウトレットパス（ファーストパス）へのディフェンスは有り。
③オフェンスの時、ドリブルは一人連続３回までボールを床につくことができる。
④８秒以内に「リバウンドOK！」とチームメイトのコールがあればショット有り（ファストブレイク）。
⑤８秒を超える場合は、シュートまでに最低４回はパス。そのうちの１回はインサイドへ入れること。

図2.　タイムテーブル

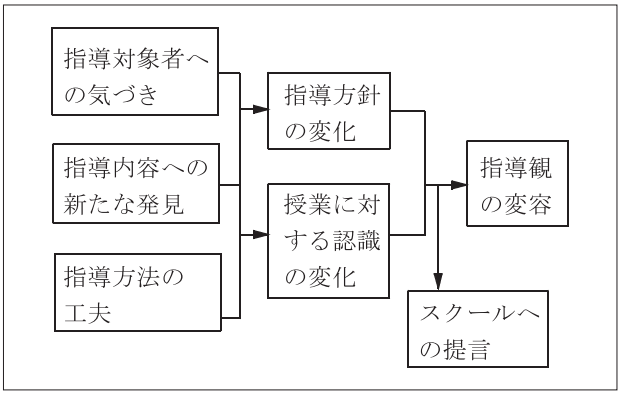

図3.　概念図

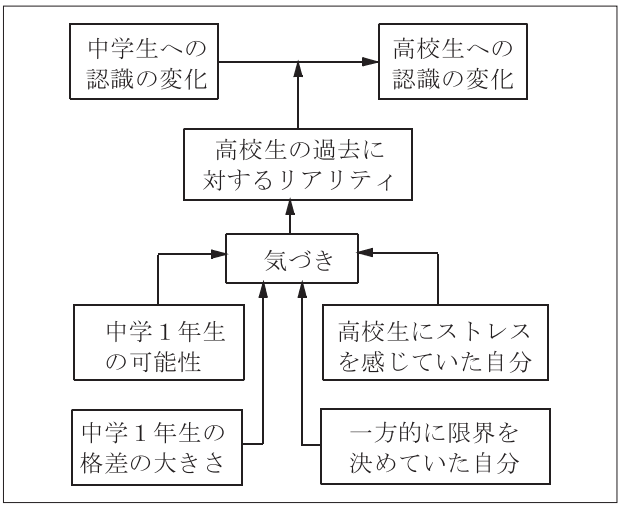

図4.　指導対象者への気づき

いた可能性もある。

②中学１年生の格差の大きさ

中学１年生の段階で技能レベルや経験に大きな差がある。どこを見たらよいのかという目の動かし方にもかなりの優劣があった。

b）高校生への認識の変化

①ストレスを感じていた自分

何でこんなことができなんだというストレスを高校生に感じていた。

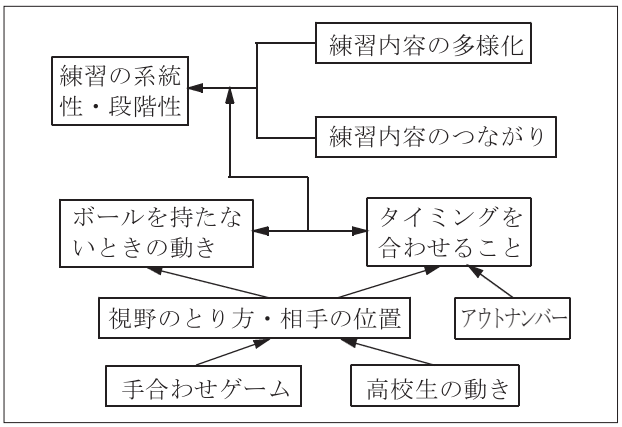

図5.　指導内容への新たな発見

②一方的に限界を決めていた自分

高校生に対しても一方的に限界を決めていたかも知れない。

③高校生の過去に対するリアリティ

高校生が過去にどのような経験を積んできたのか、どのような指導者に出会ってきたのか、リアリティを伴って考えられるようになった。

(2)　指導内容への新たな発見（図５参照）

a）練習の系統性・段階性

①練習内容の多様化

事前に準備された指導内容が多様であり指導者として勉強になった。

②練習内容のつながり

事前に準備された指導内容が系統的・段階的になっていて勉強になった。

b）ボールを持たないときの動き

①指導の困難さ

ボールを持たないときの動きは、ボール操作の動きに比べると指導するのが難しい。

②視野のとり方

ボールを持たないときにどこを見たらよいのか、どんな視野のとり方をしたらよいのかを細かく指示することができた。

③手合わせゲームの活用

手合わせゲーム[3]を活用してボールを持たないときの動きの必要性をボール保持の動きと平行して練習することが大切であることを伝えるのが精一杯であった。

c）タイミングを合わせること

①アウトナンバー

タイミングを合わせるのはボールを持たないときばかりではなくアウトナンバーでの最後のパス出しにも関係する。

②相手の位置

味方ばかりではなく相手の位置を見ておくことで、プレー中のタイミングを覚えた可能性がある。

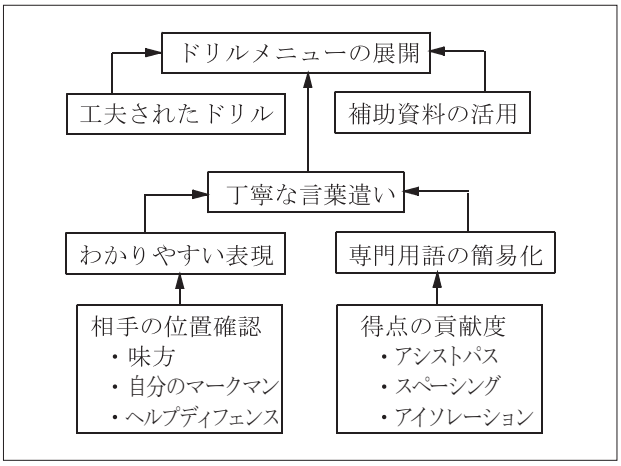

図6. 指導方法の工夫

③高校生の動き

補助員として一緒にプレーした高校生の動きをみて飛び込むタイミングを覚えた可能性がある。

(3) 指導方法の工夫（図６参照）

a）丁寧な言葉遣い

①専門用語の簡易化

バスケットボールの専門用語は難しいのでかみ砕いて説明した。

②わかりやすい表現

中学生にわかりやすく丁寧な言葉遣いを工夫するようになった。

b）ドリルメニューの展開

①工夫されたドリル

工夫されたドリルがたくさん準備され、毎回新しいメニューに取り組んだことで中学生に刺激を与えることができた。

②補助資料の活用

事前に練習内容を収録した DVD を中学生に渡していたので､中には予習して来る子どももいてよかった。

c）相手の位置確認

①味方の位置

味方の位置を見ることが大切であると伝えることができた。

②自分のマークマンの位置

自分についているマークマンが他の人のプレイを邪魔していないか確認することが大切であると伝えることができた。

③ヘルプディフェンスの位置

３人目のヘルプディフェンスを視野に入れることが大切であると伝えることができた。

d）得点の貢献度

①アシストパスの貢献

得点を決めることができたのは、パスを出してくれた人のお陰なのでその人にも点数をあげようと工夫した。

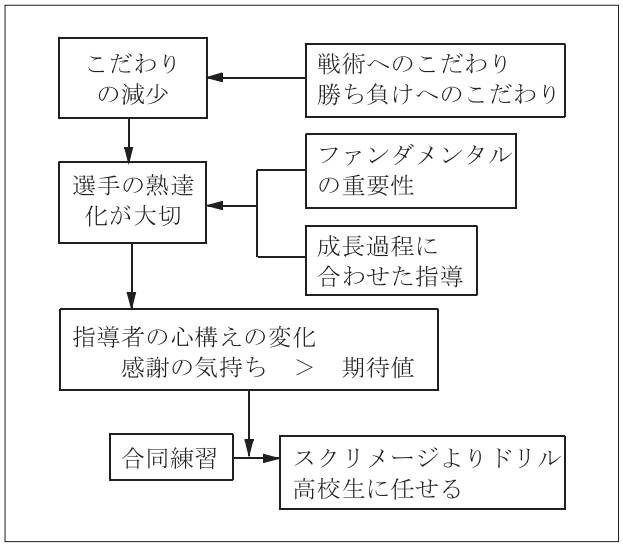

図7. 指導方針の変化

②スペーシングの貢献

得点を決めることができたのは、シュートできるようにスペースを空けてくれた味方のお陰なので、その人にも得点をあげようと工夫した。

③アイソレーションの貢献

得点を決めることができたのは、相手のディフェンスを自分に引きつけてくれていて、ディフェンスがシュートの邪魔をしに来なかったからなので、その人にも得点をあげようと工夫した。

(4) 指導方針の変化（図７参照）

a）こだわりの減少

①戦術へのこだわり

以前は戦術にこだわっていて練習に費やす時間も多かったが、今は減った。

②勝ち負けへのこだわり

以前は勝ち負けへのこだわりが強かったが、今は少し減った。

b）選手の熟達化が大切

①ファンダメンタルの重要性

以前も大切だと思っていたが、今は以前にも増してファンダメンタルの重要性を感じている。

②成長過程に合わせた指導

頭では分かっていたが、子どもたちの成長過程に合わせた指導が必要であると再認識できた。

c）合同練習

①スクリメージよりドリル

以前は中学生と合同練習をするときは、５対５などが多かったが、今は高校生と一緒に様々なドリルをやることが多くなった。

②高校生に任せる

中学生の指導を高校生に任せるようになった。

d）指導者の心構えの変化

①感謝の気持ち

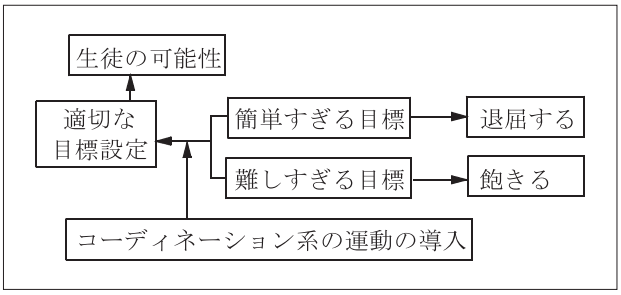

図8. 授業に対する認識の変化

スクールに来てくれていることに感謝するぐらいの気持ちで、うまくしてやろうとか思わないことが大切。

②期待値を下げる

指導者側の期待値が高すぎるとよいコーチングができないと気づいた。

(5) 授業に対する認識の変化（図８参照）

ａ）生徒の可能性

授業でも一方的に子どもたちの限界を決めていたことに気づき、限界をつくらなくなった。

ｂ）コーディネーション系の運動

ウォーミングアップにコーディネーション系の運動を取り入れた。

ｃ）適切な目標設定

簡単すぎる目標を設定して退屈させたり、難しすぎる目標を設定して飽きられたりすることが少なくなった。

(6) スクールへの提言（図９参照）

ａ）指導内容と時間

①指導内容の精選

時間が限られていてコートと人数の条件を考えるともう少し内容を絞る必要がある。

②時間の延長

８回という時間的な制約があるが、もう少し回数を増やすか１回の時間を長くする必要がある。

ｂ）テーマ設定

①テーマの絞り込み

内容が多岐にわたっているので、毎回のテーマを絞ってポイントを明確にすることが必要である。

②ストーリーづくり

１回の中でどのような展開にするのか事前にストーリーを作っておくことが大切である。

ｃ）ハーフコートの対人練習中心

①２対２、３対３

２対２、３対３という局面に限定した方がよい。

②ドリルの集積化

１つのドリルから派生的に動きを構築した方がよい。

ｄ）体幹トレーニング

①ウォーミングアップで実施

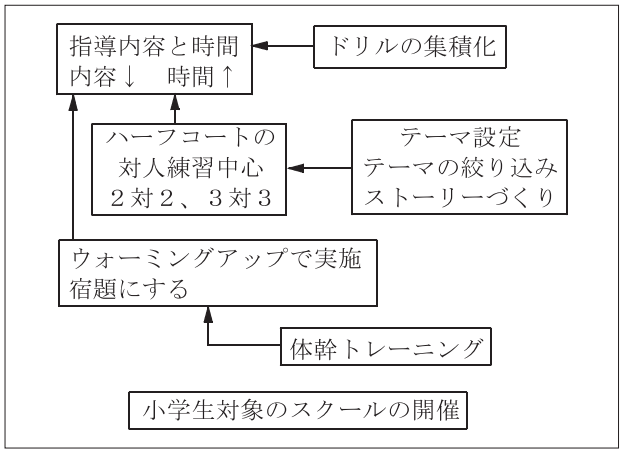

図9. スクールへの提言

体幹トレーニング（スタビライゼーション）は、最後にやるのではなく、最初のウォーミングアップで行った方がよい。

②宿題にする

トレーニング系は、身体の使い方を伝えて宿題として自宅や学校で自主的に行うように促すのがよい。

ｅ）小学生対象のスクールの開催

中学１年生でこれだけ差が開いているのであれば、小学生を対象にこうしたスクールを開催する必要がある。

６．スクール体験前後の指導観の変容

北村はブラジルサッカーのプロコーチの指導実践からスポーツ選手の熟達化に作用するコーチングは、「熟達化」、「意識化」、及び「支援」の３つのカテゴリーによって構成されることを明らかにしている[4)]。本研究の指導方針の設定は、サッカーの国ブラジルでの子どもたちの指導現場調査の影響を特に強く受けている。本研究の指導方針はこの３つのカテゴリーと重なっており、従来の日本の指導から海外のコーチングの手法へと移行するためのキーワードとも言える。

本研究の結果、高校の指導者は、戦術や勝ち負けにこだわっていても選手の熟達化がはかれないことやその選手の熟達化を支えるのは、プレー中にどこを見たらよいのかやどんなことに意識したらよいのかをしっかりと伝える必要があることに気づいたことが明らかになった。そして、指導者が子どもたちに教え込むのではなく、子どもたちへの期待値を下げ、子どもたちへの感謝の気持ちを忘れずに、その成長を支援していくことで、子どもたちが自主的に学びを形成していくことの大切さを学んでいる。このことは、特にＡ氏とＣ氏の次の発言に表れている。

＜Ａ氏の場合＞

スクール後の普段の高校生の指導について振り返りながら次のように述べている。

「ん～、そうですね。ま、すごく技術とか、考え方を、ま、私もすごく強調するようになったのもあると思うんですけど、それを大事にするようになった。子供たち同士のコミュニケーションとってる中身とか、それをやんないと負けちゃうよ、だけじゃなくて。技術があって、考え方があって、バスケットボールをやってみて、レベルがどう上がるかはひとそれぞれ違うから、自分のうまく上がったところを、もっと強くしていこう、みたいな、一人ひとりが自分のうまくなる方向を見つけやすくなった、なったかどうかはわからないんだけど・・・・。」

日頃教えている高校生の会話の中から子どもたちの意識の変化を読み取っている様子を表している。

＜Ｃ氏の場合＞

スクール後の練習の際にどうしても全体で取り組めない内容についてプレイヤーの自主練に任せるようになったことについて次のように語っている。

「C：はい、それをま、いくつか、全体でやって確認する中で、今度はそれをじゃ、今こっちをやっているからそれを自主練の中で、とか、そういう風には・・・」

「Q：なるほど、そうするとやっぱり、その組織的な動きと、それからそれに繋がる個々の動きっていうのを、しかも、一人ひとりにある程度材料を提供するような・・・。」

「C:そうですね。っていう風にはして。ある程度、グループじゃないですけど、グループのようなものを作ったりして、トレーニングしてるグループであったり、じゃ、今ハンドリングしているグループであったりとか、っていうような工夫は･･･自分の中で､それって今思うとやっぱりあそこで、スクールで携わったことによって、見えてきたものだったのかなぁ～、自分たちのチームを客観的に見るいいチャンスだったなぁ。」

語りながら最後に実はそうした指導方針の変化がスクールの影響であったことにインタビュー中に気づいている様子が伺える。

２人ともスクールでの直接的な体験から一度離れて、普段の高校生の練習に向き合っている自分に対して省察しており、指導前と指導後の指導観の違いについて、スクールでの体験が影響していたと気づいている。

Ｂ氏とＤ氏については、スクールでの直接的な体験についての言及が多く、その後の高校生への指導を客観的に省察する言及はあまりなかった。したがって指導観が著しく変容したとまでは言えないが、指導方法や評価の観点について次のような変化が見られた。

＜Ｂ氏の場合＞

Ｂ氏については、中学生との合同練習の際にこれまでと違って高校生に指導を任せるようになったと述べ、高校生の成長について次のように述べている。

「B：高校生もやっぱりそういうの教えたりすると高校生自身も人間的に成長できたりもしますんで。」

「Q：なるほど」

「B：それはだいぶ助かってますね。」

「Q：高校生が教えることで・・・。」

「B：あ、もう高校生がだいたい中学生を、20 人ぐらいなんで、一人つけて、で、一緒にダイナミックストレッチやったり､ラダーやったりしますし､そういうものやったりもしますし・・・。あの、普段適当な奴でもちゃんとしますよね。」

Ｂ氏は、高校生に「任せる」という行為により子どもたちが成長することに気づき始めている。Ｂ氏の場合、バスケットボールスクールに普段指導している高校生の大半をアシスタントとして活用しており、そこで示範をさせたり、指導のサポートにあたらせていた。このようにスクールの直接的な体験により高校生への認識を新たにし、それまで任せられなかった自分が任せられるようになったことに気づいている。

＜Ｄ氏の場合＞

Ｄ氏はアンケート調査の結果を見ながら次のように語っている。

「相手の動きを予測することよりも､ちょっとアンケートから外れるんですが、練習の展開を予測していくっていうか、あ、次はたぶんこういうドリルが来るだろうとか、え～、まあ､2ヵ所でやりますって言った時に、こう、非常に主体的に動いて、例えば、コーンを準備したりとか､列を作ったりだとか､そういうリーダーシップとか､練習全体への気配りってんですか、洞察力みたいなことが高い子が、やっぱり、パフォーマンスも高い･･･。っていう風に思ったので、そのパッと言ってパッとできるっていうのは､そのスキルの部分っていうことよりも、やっぱりコミュニケーション能力ってんですかね､その、こちら側の意図を理解して、じゃ、自分が次にどういう風に表現したり、動くことによって練習がスムーズにいくかみたいなことを凄くよく理解している子と､何か･･･ボーっとして、ただ後ろをついていく子との差っていうのが凄く大きいなって感じましたね。」

スクールの目標として＜関心・意欲・態度＞で最初に掲げた項目が、＜知識・理解＞さらには＜技能＞へも波及するほど重要であることに気づき始めている。スクールでの直接的な体験から、子どもたちを評価する新たな観点に気づき始めたことを表している。

Ｂ氏とＤ氏については、こうした自分自身の変化を客観的に省察し、普段の高校生の練習でその気づきを具現化できるようになると指導観の変容をもたらすものと期待される。

７．まとめ

子どもたちへの認識を新たにしたことや新しい指導内容と指導方法への取り組みとその難しさに直面したことによって、指導者はそれまでの実践を反省的にとらえることができるようになり、スクール指導体験前後で指導方針に変化が生じ、指導観に変化の兆しがみられる。

特にＡ氏やＣ氏のようにコーチ主体の指導からプレイヤー主体の指導への転換の兆しがみられたことは、組織力を重んじてきた日本のチームスポーツの指導に変化をもたらす可能性を示している。チームスポーツにおいても個の力を育てることが重要であり、個の力を育てるためには練習中にどのようなところに目を向けたらよいのかという意識改革が必要である。そうした意識改革を行うためにはコーチが前面に立つのではなく後方からの支援に回ることが大切であるということに、指導者が気づき始めた。今回のスクールの指導内容や指導方針は、こうした指導者の指導観を変容させる契機となったと言えよう。さらに言えば、半年後に実施された本調査そのものが当該指導者の省察を促す効果があったとも言える。

もちろん、スクールの運営やカリキュラム内容に対する不満や提言もあり、特にボールを持たないときの動きについては、対象となる中学１年生のレベル差や人数やリングの数や時間的な問題があって、他の技能のように十分指導できたとは言いがたい。

しかし、単にシュートが入ったからよかったというような結果管理ではなく、得点の貢献度を子どもたちに説明するなどの工夫をしながら、いずれの指導者も経過観察に努めるようになっていた。

残念ながら体育授業ではバスケットボールの単元が秋に行われることが多く、昨年度はスクールと平行して実施されていたため、その影響について、詳しく聞き取ることができなかった。

今後は、指導者の意識の変化に加えて、スクールで学んだ子どもたちが「ボールを持たないときの動き」を意識して体育の授業に臨むことができるようになるのかについて調査を進めたい。

謝辞：本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「ゴール型ゲームの運動課題と評価の観点～条件制御で誘発される運動技能を探る～」（課題番号 22500560）で得られた成果を元にカリキュラムを構成して、茨城県バスケットボール協会のご協力を得て実現した。多大なフィールドを提供して下さり、ご協力をいただいた全ての協会役員、バスケットボール指導者、そして中学１年生とその保護者をはじめ、バスケットボールスクール指導の補助に携わって下さったすべての高校生、大学生に感謝いたします。

参考文献

１）加藤敏弘，岩崎晋，大高敏弘，茨城県バスケットボール指導者養成の現状と課題，茨城大学教育実践研究，24，2005，279-293.

２）姫野完治，渡部淑子，省察を基盤とした教育実習事後指導プログラムの開発，秋田大学教育文化部教育実践研究紀要，28，2006，165-176.

３）加藤敏弘，ステップアップ中学体育，大修館書店，2010，110-131.

４）北村勝朗，「教育情報」の視点による「コーチング」論再考～ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として～，教育情報学研究，2，2004，71-80.

【連絡先　加藤　敏弘
E-mail:tosikato@mx.ibaraki.ac.jp】

The changing process of the basketball coaching philosophy
—Through coaching in Ibaraki Basketball School—

Toshihiro KATO[1], Atsushi SHIMBO[2]
[1]*Graduate School of Education Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Shizuoka University*
[2]*Faculty of Education, Shizuoka University*

Abstract

A new type project, named Ibaraki Basketball School, is the one for Ibaraki National Sports Festival 2019. From November, 2012 to February, 2013, the school gave eight two-hour-lessons at seven venues in Ibaraki prefecture. Regardless of athletic activities in their junior high schools, 263 junior high school students had participated. The author set the aim and made curriculums of the school based on his overseas research of basketball coaching for children. This project can connect the social physical education and the school physical education, therefore, it is important to verify the effect of this project for considering future athletic school activities.

The purpose of this study is to clarify how coaches have changed their coaching and teaching philosophies through the school. Six months after of the school, we interviewed four high school basketball coaches who joined it as coaches. They have changed their philosophies as follows:

1) They have come to see how their players had been coached in junior high schools. Because by coaching various junior high school freshman players in the school, they noticed much difference of players' basketball skills.

2) They understand their players more deeply and think it is important to change how to coach according to players' level. Before the school, they had too high expectations for players and they got stressed from failure of their players. But now they get less stressed.

3) They noticed that getting better fundamentals is the highroad to winning. Though the school, they have anew noticed the importance of fundamentals from various practices of the school. They give more practices for developing basic abilities than those for tactics.

4) It was difficult to teach how to move without ball, however, it is important to teach players how to see teammates, opponents and space of the court. For making this possible more easily, they have changed how and what to talk to players.

As above, they have been changing their coach-oriented philosophies to player-oriented ones.

Keywords

coaching, coaching philosophy, basketball school, reflective practitioners